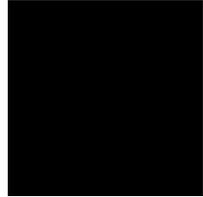


再び学ぶこと

富吉 貴浩

(コミュニティ福祉学科 2003 年卒業)



大学時代は授業の最後まで教室にいないこともしばしば。決して真面目な学生とは言えませんが、社会人 13 年目にして働きながら再び大学院で学ぶこととなり、周囲の理解と助けのおかげで修了することができました。もちろん、研究者を目指したのではないので通常の修士、博士の皆さんとは比較になりませんし、一括りに大学院生と名乗ることの無礼を、そして福祉の世界とは全く違う道に進んだ自分がこのページで文章を書くことをご容赦いただきながらお読みいただければと思います。

大学院に行こうと思った直接のきっかけは二つあります。まず、旅行会社勤務時代にタイ・バンコクに駐在したときの経験です。現地では在タイの日系企業や現地企業の各種イベントやタイ発のインセンティブツアー（報奨旅行）等の営業、プランニング、斡旋が主な担当でしたが、現地ではタイ人にいくら社名を言っても当時の知名度は日本とは比べものにならないという状態でした。日本では当たり前と思っていた会社の「信頼」「安心」というブランドは、持ち運びできず各地で一から培う必要があるという事実を肌で感じました。そのため、単年度の営業先として必然的に候補になるのが、まずは自社のブランドを理解していただいている日本人駐在員になりますが、バンコクに赴任している日本人駐在員の多くは現地法人の経営者クラスです。「タイ社会でなぜ旅行やイベントが有効か」「タイ人はどんなことを大切にし、何に喜ぶか」「ビジネスにとってどんな効用があるか」「かかる費用はどう処理されるか」という経営者が知りたいことをまとめて伝えることができなければ川上でのビジネスはできない、営業スキルだけでなく経営全般の基礎知識も必要であることを痛感しました。

もうひとつのきっかけは、まだ自身が日本で営業担当者だった頃のことです。ある程度年次が上になり、それなりの結果を出し、会社にも支店にもそれなりに貢献していたと思います。そのため、会社、支店にとって良かれと思う意見は遠慮なく伝え、それに異論を挟む人はほとんどいませんでした。正しい方向に皆で進むにはそれが良いことだとずっと思っていたのですが、ある時、自分の意見が正しいから皆反対をしないのではなく、ただ単に誰も何も言えなくなっただけということに気が付きました。社会人として年次が上になり、それなりに結果を出す人に対して段々と注意をしてくれたり意

見をくれたりする人は少なくなります。厄介なのは、その状態が時として心地よく感じることであるのです。ただ、一步引いた目で見たときに、それは裸の王様です。自分の意見が将来的にも絶対的に正しいということは稀です。社会は動いています。社会が動いているということは、仕事の前提条件も変わってきているということです。社会の変化、前提条件の変化というのは目には見えにくく、時として不都合なものを自分に都合よく解釈して見逃してしまいます。年次が上がると、自分で注意していないと社会の変化を見逃し、独りよがりになる可能性があると感じました。

社会人として自分が積み上げたものが高くなればなる程、変化することに対して拒否感が強くなる気がします。そして、往々にして社会の変化を自分に都合よく解釈する術に長けてきます。それは勤め人として生きていくためには必要な能力の一つかもしれませんが、一方で、これだけ社会の変化が速い時代においては、これまで許されていたことがあつという間に許されなくなることもしばしばです。社会の変化を都合よく解釈してやり過ぎの方が良いか、変化に対して柔軟に対応する方が良いか、自分自身で選択する必要性を感じます。

勤め人だと、特に若いうちは会社や社会の全体像を見る機会は少ない人の方が多いのではないのでしょうか。正確に言えば、相当意識しなければ見えないと思います。少なくとも私はそうでした。そのため、自分の目に見える範囲のことだけで判断しがちになります。目の前の狭い世界ではそれでうまく回るのでそのやり方に自信を深めます。ただ、異動でまったく業務が変わったり、社会のルールが変わった時にはその自信が逆に仇となり、自分のやり方を変え難くなります。そうならないためにと考えた答えが「学ぶこと」でした。

私が通った大学院は、経営に必要な経営戦略、マーケティング、財務、企業倫理等を幅広く基礎知識として学び、その上でテーマを選び1年間実践的な学びに取り組みます。正直、2年間大学院に通っただけで、実業界で直接役に立つスキルは身につきません。ただ、この2年間で自分とは全く異なる考え方の友人の意見に触れることで、「そういう考え方もあるのか」と思えることが少しだけ増えたと思います。これは、自分で見ている世界を疑うという視点かもしれません。

これまでに築いてきたものが多ければ多い程、自分で見ている世界を疑うことは自己否定になりかねず、自信を失いかねないこともあるかもしれません。その時に抛り所となるのは、その奥にある自身の価値観や信条、考え方であり、私にとってそういうものは大学時代に多くの方とのふれあいの中で培われたものが多いような気がします。

「富吉さん、仕事は会社のためにするんじゃないんですよ。社会のためにするんですよ。」大学時代にお会いした社会人の大先輩の言葉です。そのためにはスキルという武

器と同時に、高い視座、幅広い視野を持ったスペシャリストになる必要があり、そのためにも学び続けることが必要であるのだと思います。そしてその信念を50代まで持ち続け、実践していた大先輩が確かにいました。その背中を遠くに見ながら、学び続けていきたいと思います。

今回のメッセージは、2011年卒の大塚光太郎さんにバトンタッチします。